

国語プリントNo. ()

年 組 番 号前

配布日 月 日 曜

東下り 仮名書き・口語訳

あつまくたり

むかしをとこありけりそのをとこみをえうなきものにおもひなしてきやうにはあらしあつまのかたにすむへきくにもとめにとめてゆきけりもとよりともとするひとひとりふたりしてゆきけりみちしゆれるひともなくてまとひゆきけりみかはのくにやつはしといふところにいたりぬそこをやつはしといひけるはみつゆくかはのくもとしゆてなればはしをやつわたせるによりてかなむやはしといひけるそのはほとりのきのかけにおりゐてかれいひくひけりそのがさはによくかきつはたといとおももしろくさきたりそれをみてあるひとのいはよめといひければよめからころもきつなれにすゑてたひのこころをははそもとしゆはるはるはるきぬるたひをしておもふとよめりければみなひとかれいはをはそもとしゆひのうえになみたおとしてほとひにけり

【口語訳】

- (1)昔、男がいたそうだ。
 (2)その男は、自分を無用のものだと思いつんだ。
 「京にはあるま」。
 (3)東国の方に住みよこの国を探しに行ひ、「と思つて旅に行つたそうだ。
 (4)以前から友とする人を、一人一人連れて行つたそうだ。
 (5)道を知つている人もなくて、迷しながら行つたそうだ。
 (6)「河の国八橋」ということに着いた。
 (7)「八」を八橋と言つたのは、水の流れる川が、
- 蜘蛛の足のよひになつてゐるので、橋を八本渡したことによつて、八橋と書つたそうだ。
- (8)その沢のほとりの木の陰に下りて座つて、乾飯を食べたそうだ。
 (9)その沢にかきつけたがとてもきれいに咲いていた。
- (10)それを見て、ある人が言うことに、「『かきつけた』という五文字を領句の初めに据えて旅の心を詠んでくれ。」と言つたので、このように詠んだ。

- (11)唐衣を着続けてよれよれになつた襷があるので、張りながら着てきたなあ。これまでの旅を二んなふうに感じた。
- 〔裏の口語訳〕

- (12)と詠み終えたので、みんなは、乾飯の上に涙を落として乾飯がふやけてしまった。